



【残りの人生どう生きるべきか】

聖書箇所:伝道者の書12章8-14節/ 暗唱聖句:伝道者の書12:13-14

説教者:鄭南哲 牧師
(Rev.Jung nam-chul)

特に、本日は2023年敬老感謝礼拝として献げますが、愛する教会家族みなさん、特にお年寄りの方々の健康のために、切にお祈り申し上げます。本日神様からの御言葉は伝道者の書です。

伝道者の書というのは“宣べ伝える、知らせる者の書(ソロモン王の人生の中神によって一番繁栄され、祝福されただけではなく、後に多く失敗したことを通して反面教師として教える。結局、人と人生はどんなもので、どう生きるべきか知らせ、伝え、教えて下さる神の御言葉)”という意味です。12章で構成されているこの伝道者の書は何かこの御言葉を読む者たちに、そして我々に伝えることがある事を暗示しています。伝道者の書は何を伝えるためにこの書を記録したのでしょうか。

<1.伝道者の著者であり、最も祝福されたソロモン王>

*ソロモンの名前意味:平和の意味シャローム(Shalom)や(エル)サレムと同じ語源

伝道者の書においてソロモンは直接自分が書いたと名前が知らせてはいたのですが、1章1節によると「エルサレムでの王、ダビデの子、伝道者のことば。」だと書かれているので、伝道者の書の記録はソロモン王(紀元前970~931年)だと知られています。イスラエルにまだ王様がいなかった裁きつかさ時代がすぎて、イスラエルの中で初のサウル王が立てられ、その後2代目がダビデ王でした。しかし、ダビデ王は自分の部下ウリヤの妻バテシェバからの始めて生まれた子は亡くなりましたが、二番目の息子として神様が与えて下さって生まれたのが、ソロモンでした。そして、サウルとダビデに引き続き、イスラエルの三代目の王となり、ソロモン王は若い21才にイスラエルの王となって40年間在任しました。

よく知られていることはソロモン王の若い時は‘雅歌書’が記録され、壮年期の時には‘箴言’が、ソロモン王の老年、人生のたそがれの時に書かれて御言葉が‘伝道者の書’であります。

第一列王記3章3節~5節によると、初期ソロモンが王になったばかりの時は神様を恐れ、神様の御心を求めました。彼が神様を恐れかしこんでいけにえを捧げました。「3ソロモンは主を愛し、父ダビデの掟(おきて)に歩んでいた。ただし、彼は高き所でいけにえを献げ、香をたいていた。4王はいけにえを献げようとギブオンへ行った。そこが最も重要な高き所だったのである。ソロモンはその祭壇の上で千匹の全焼のささげ物を献げた。5ギブオンで主は夜の夢のうちにソロモンに現れた。神は仰せられた。「あなたに何を与えようか。願え。(3-5節)」」

ソロモン王の礼拝と献身の心を喜んで下さった神様はソロモン王に“あなたに何を与えようか。願え”と言われた時、ソロモン王自分は神の前で小さな子どもで、出入りする術(すべ)すら知らない者(列王記第一3章6)なので、イスラエルの民を神の御心に相応しく、正しく治められるようにと神の知恵を求めました。金や権力を求めず、王として、神の知恵を頂き自分に与えられていた使命と責任を最後まで果たそうとしていた姿に喜んで下さった神様は彼が求めた神の知恵だけではなく、なかった富と誉れまですべて加えて下さいました。神様はソロモン王に「あなたの生きているかぎり、王たちの中であなたに並ぶ者は一人もいない(第一列王記3:13)」で言われました。

それでソロモン王は人類の歴史上もっとも知恵の象徴的な存在として呼ばれるほど祝福されました。

第一列王記4章30節では「ソロモンの知恵は、東のすべての人々の知恵と、エジプト人のすべての知恵とにまさっていた。」そして、第一列王記4章34節によると、ソロモン王の知恵のうわさを聞いた王たちのもとから、あらゆる国の人々が、彼の知恵を聞くために訪ねて来るほど当時にも今日に至るまでも知恵の王として知られるようになりました。

例え、エチオピアのシェバの女王がソロモンの名声を聞いて訪ねるほどでした(第二歴代誌9:1)。聖書にも知恵の人の体表的な存在として認められ、聖書には“ソロモンの知恵”もしくは“ソロモンのすべての知恵”という表現が聖書に何度も言及されています。(第一列王10:4, 23, 11:41, 第二歴代誌9:3, 22, 23, マタイ12:42, ルカ11:31)

箴言や伝道者の書を見ると、まさしく彼ほど歴史上最も知恵の人であり、賢い人物として祝福された人も少ないでしょう。

知恵だけではなく、ソロモン王は富と名誉と栄華を極めた王となりました。「ソロモン王は、富と知恵において、地上のどの王よりもまさっていた。(第一列王記10:23, 第二歴代誌9:22)」イエス様も「栄華(えいが)を極めたソロモン(マタイ6:29, ルカ12:27)」という表現をされたというのは神から彼の富と栄華と名誉がどれだけ祝福されたのかが分ります。

それだけではありません。ソロモン王の時代にはイスラエルの王国領土が一番拡大され、繁栄されていました。

「あの大河(たいが)からパルシテ人の地、さらにエジプトの国境(くにざかい)に至る、すべての王国を支配した。」(第一列王記4章21節、第2歴代誌1章・第二歴代誌9章26節)。イスラエルの一番の全盛期と平安な時代を迎えました。

そして、一番強い国力(こくりよく)と軍事力も高め、持っていました。軍隊を養成し、軍費(ぐんび)を蓄え、最高の軍事力を保っていた時代(騎兵のための領地建設(第一列王記9章18-19)、戦車1400台、馬に乗っていつでも奇襲(きしゅう)出来る騎兵は12000人(列王記10章26節)、馬屋が四千箇所以上(第二歴代9章25節))ともなりました。

彼はこのような政治的な能力だけではなく、詩と文学、芸術、動植物学科などあらゆる分野でも卓越した知恵と学習能力を持

って、詳しく人物でした(第一列王記4章33節)。

ソロモン王が今までなかった一番の業績は神に礼拝を捧げられる神の聖殿(ソロモン聖殿と呼ばれた)を初めて紀元前957年に完成するまで7年間建てることに用いられました!

(*建築年数7年間・働いた労働者数:約3万人ほど、山で聖殿に使う石と岩を切る人だけ8万人、運ぶのに7万人が動員*聖殿に使う最高級レバノンにの杉材の木を切るために毎日1万人ずつ派遣する(第一列王記5-6章、7:15-51)

<2. ソロモン王の失敗と墮落による反面教師となる>

ところが、全てが祝福され、物事がうまく行く時、ソロモン王は神を背き、神から離れ始めます。

国が豊かになり、平穏になって安定してくると、彼の生き方は神から離れ、墮落に陥ってしまいます。

結局、神から与えられたすべての富と権力、王の立場を利用し自分の本能の欲する通り止めず、快樂の道具となってしまいます。伝道者の書2章10節の中「自分の目の欲(ほっ)するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆることを楽しんだ。」と書かれています。ソロモン王が自分で告白するように「私はまた、自分のために銀や金、それに王たちの宝や諸州(しょしゅう)の宝も集めた。男女の歌い手を得、人の子らの快樂である、多くのそばめを手に入れた。(伝道者の書2章8節)

ソロモン王は自分の妻に満足せず、およそ一千人ほどの女性を自分のそばに置かせました(列王記第一11章1~3節「1ソロモン王は、ファラオの娘のほかに多くの異国人の女、すなわちモアブ人の女、アモン人の女、エドム人の女、シドン人の女、ヒッタイト人の女を愛した。2この女たちは、主がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中にはいってはならない。彼らをあなたがたの中に入れてもならない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転(てん)じて彼らの神々に従わせる」と言われた、その国々の者であった。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかった。3彼には七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめがいた。その妻たちが彼の心を転(てん)じた。」)

それだけではなく、創造主の神以外の異邦の偶像の神々を拝んでいた女たちを自分のそばめとして受け入れると、何とソロモン王自分さえもさっそく影響され、偶像崇拜に陥り、アシュタロテを拝み、ミルコムとモレックにも拝んで、グモスの神まで全部拝んでしまいます。列王記第一11章5-7節では、「ソロモンは、シドン人の女神アシュタロテと、アモン人のあの忌(い)むべきミルコムに従った。6こうしてソロモンは、主の目に悪であることを行ない、父ダビデのように、主に従い通さなかった。7当時、ソロモンは、モアブの忌むべきケモシュのために、エルサレムの東にある山の上に高き所を築いた。アモン人の、忌むべきモレックのためにも、そうした。」)

結局、神を離れ、全ての世の楽しみと快樂を愛し、体験した結果、神の厳しい怒りを受けるしかなくなりました。「主はソロモンに怒りを発せられた。それは彼の心がイスラエルの神、主から離れたからである。このことについて、ほかの神々に従って行ってはならないと命じておられたのに、彼は主の命令を守らなかったからである。(列王記第一11章9-10節)」

そういうわけで、ソロモン王は老後、神の前で全ての人生の歩みを振り返ってみながら、経験した彼の告白はこうでした。「私は、日の下で行なわれるすべてのわざを見たが、見よ、すべてが空しく、風を追うようなものだ。(伝道者の書1章14節)」

<3. 伝道者の書のメッセージ：だから日の下での空しいものじゃなく、ひたすら日の上(創造主の神)のみを見上げ、信じ、神の御言葉通りに生きなさい!>

彼は老年になって、ようやく今までの人生の歩みと生き方を振り返ってみながら、神の御前で懺悔(ざんげ)しつつ悔い改めながら、神様の御前でこの人生の意味を問いかけています。我々の人生はどこから来てどこに向かっているのか。日の下で一度だけのこの人生をどうやって生きるべきだったのか。彼が神に最も祝福された者でありながら、後一人の大きな失敗の経験者として、これから神の前でふさわしく人生を歩もうとしている人々にメッセージを投げている、これがまさに伝道者の書なのです。

伝道者の書のカギになる一番よく出てくる単語が二つありますが、空(meaningless)、むなしい(vanity) 34回「日の下で」という言葉が31回も出ています。

伝道者の書はどうやって始まっていますか。伝道者の書1章2節に、「空の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。」この伝道者の書の結論になる12章8節でも今までの人生の中でやった事をすべて述べてから結論的にもう一度繰り返されています。「空の空。伝道者は言う。すべては空。」

英語の聖書ではこの「空」という意味を「Meaningless」で訳しましたが、空の意味は「息を吹き掛ける」(例え、寒い時、手に息をふきかけると、しばらくその息が白く目に見えますが、すぐ消えて見えなくなってしまうように、世のすべてが一瞬のもので、すぐ消え去る一瞬のものであるため、むなしいという言葉が使われたのです。そいう

うわけで伝道者の書でこの単語は頻繁に出ているのです。)’ という意味です。

ですから、「日の下ですべてが空（むなしい）という意味は、より言語に基づいて解釈すると、「日の下で永遠のものではなく、しばらくにすぎない」という意味です。実に、ソロモン王は、日の下で永遠にいつまで続くのではなく、しばらくのものである意味が含まれています。神様なしに日の下で色々なことに手出して人生の真の目的と満足を探そうと努力してもむなしいし、意味がなかったということを伝道者の書は語っています。

そういうわけで伝道者の書によると、日の下で人間の知恵もむなしいし(伝道書1章12-18節)、快楽もむなしい(伝道書2章1-11節)、富もむなしい(伝道書2章12-23節)、人間のすべての努力もむなしい(伝道書2章24節-3章15節)ということ語っています。4章から11章まではすべてがむなしいという主題をさらに拡大し詳しく説明する内容が書かれています。

しかし、愛するクリスチャン信仰の家族のみなさん！決して誤解(ごかい)してはいけません。

この伝道者の書のメッセージは虚無主義(ニヒリズム(nihilism))や悲観主義(人生は何の生きる意味もなく、人生はどうでも良い)と主張しているのでは決してありません！

伝道者の書で、神はソロモン王を通して、日の下ですべてがむなくしばらくあって消えるものだからこそ、方向を変えて日の上に永遠におられる真の神様を見上げる時、人生のまことの意味と望みを見出し、永遠の神の救いと祝福にあずかる人生となれる！ですから、神のみを見上げて、その神を信じ頼り、神の御言葉通り従って生きる時こそ、神から許されたこの地上での一度の人生を幸いに生きることが出来るファイナル・アンサー(最終回答)だったと教えて下さっています。

〈4.伝道者の書の結論のメッセージ〉

伝道者の書を結論的にまとめたところが今日の本文の13-14節です。「13結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。14神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。」

「結局のところ、もうすべてが聞かれていることだ。」‘言うべきことすべて言ったはずなのだ。だから結論はこれだ！’と読む我らに教えて下さっています。12章1節の「あなたの若い日(まだ生ける力があるうちに)に、あなたの創造者を覚えよ。」というメッセージで結論を出して終わっていますが、まとめて、3つのポイントでまとめて見る事ができます。

①神様なしの日の下ですべての人生の結末は空しくなるのみである

どんなにたくの権力と名誉、快楽、お金を所有し、世の欲しがるすべてのものを手に入れたとしても、神様と関係なく、神から離れ、神様のいない人生の結局は、むなく終わるしかないのが人の人生であることを明確に教えて下さっています。これが、人をお造りになり、命を与え、すべての人に一度の人生を許して下さった神様がソロモン王を通して我らに悟らせて下さっている真理であります。

②真の神様を愛し、恐れかしこみつつ、神様の御言葉に従って生きることが神に祝福され豊かな人生の道である

(13節「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。’)結局、伝道者の書を通して、人が追い求めるべき人生の最善の道が何であるかをよく教えて下さっています。伝道者はこれがまさに人間の持つべき務(つと)めであると教えて下さっています。すでに神様はソロモンを通して箴言1章7節「主を恐れることは、知識の初め。愚かな者は知恵と訓戒をさげすむ。」

箴言9章10節で「主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟ることである。」と教えて下さいました。人生のまことの知恵は神様を知り、信じることから始まります。創造主神様のみ真の神の救いと永遠のいのちと祝福の源であるからです。人間は本来真の神様を信じ、その真の神と交わりながら生きようと造られた存在です。

③神様は地上で人のすべての行いをご存知であり、必ず報い、裁かれる

(12:14節「神は、善であれ悪であれ、あらゆる隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからである。’)これが伝道者の書の最後のメッセージです。

神様は我々の考えていること、心のすべてのはかりごとやすべての行い、他の人の知らない隠密(おんみつ)なことさえもすべてご存知であり、正しく報われ、裁かれるお方であることを教えて下さっています。ですから、神の御前で我らは何一つ隠すことが出来ません！そして、人の人生とは生きている時が決してすべてではない事を暗示して下さいます。かならず、神が許して下さったこの一度の人生の旅路の時を終わった時には、だれであってもかならず、神の御前にお立ちになり、人生のすべての行われたことに対し、精算をされ、報われる時が待っている事を覚えて生きる時こそ、自制をかけ、罪を警戒し離れ、守られていくことが出来ます。

愛する信仰の家族のみなさん！我々の生涯では2度もなく、練習はありません。通って来た我々の人生の旅路を消すこともできません。神様の報いは平等です。神様の報いは正確で、正しく行われます。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！だからこそ、今生かされて我々の一度の人生がどれだけ神様の御前で大切なのか逆説に教えて下さっているのではないのでしょうか。
だから、まだまだ自分の人生はこの地上でまったく問題がないと、まるでこの地上で、今持っているすべてが永遠に続くのだと勘違いしていらっやいませんか。

我々の人生が長いように感じる時もありますが、人生を振り返ってみると、どんな早いものなのかわかりません。
詩篇90篇4節に「まことに、あなたの目には、千年も昨日のように過ぎ去り、夜回（よまわ）りのひと時ほどです。」詩篇90篇10節では人生についてこのように表しています。「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。そのほとんどは、労苦とわざわいです。瞬（またた）く間に時は過ぎ、私たちは飛び去ります。12どうか教えて下さい。自分の日を数えることを。そうして私たちに知恵の心をえさせてください。」
詩編90篇12節には「自分の日を数えること」は、「知恵」を得るためだと教えて下さっています。

今日の伝道者の書の結論は、かつてソロモン王の父であったダビデの告白と似てるような内容だと感じさせられます。詩篇39篇4-6節です。「主よ。お知らせください。私の終わり、私の齢がどれだけなのか。私がいかに
はかないかを知ることができるように。5ご覧ください。あなたは私の日数を手幅（てはば）ほどにされました。
あなたの御前では私の一生はないも同然（どうぜん）です。人はみなしっかり立ってはいても実に空しいかぎりです。
6まことに、人は幻のように歩き回り、まことにむなしく立ち騒（さわ）ぎます。人は、蓄（たくわ）えるが、だ
れのものになるのか知りません。」そして、結論的人生の答えはこうでした。
「主よ。今、私は何を待ち望みましょう。私の望み、それはあなたです。（詩篇39篇7節）」

伝道者の書は人生の結局、ソロモン王の生涯を通して、人間のなやむべきすべての疑問と絶望と試して見るすべてが書かれています。ソロモンは人生の末に人生における飢え渴きとむなしさの中で、人生の真の意味と人が残りのこれからの人生をどう生きるのか問いかける神様の御言葉です。
ソロモン王は死ぬ直前、悔い改め、もう一度神様を見上げます。そして、この伝道者の書を読んでいるすべての者たちがくれぐれも自分のような生き方は繰り返さないようにと反面教師（はんめんきょうし）として証しとし、語っています。そして、われわれにこう伝えてきます。
“今日からもう一度神を見上げて、新たに神に立ち返って生けるチャンス、その機会がまだ神はあなたに許して下さっているのだから！”

今日この伝道者の書に招待された我々はしばらく何一つ隠すことの出来ない神の御前で今までの人生の歩みと生き方を振り返って見て下さい。神様の御前で私は今まで何を求めるために、何のために必死に生きて来たのか。いったい自分はどこへ向かって頑張っていて走り続けているのか。
今日我々を招いて下さった伝道者の書を通して、今この時点でもう一度目を上げて、神様と関係を立て直し、心を創造主なる神様に向かって謙遜に神を心から恐れかしこみ、愛し、その御言葉に信じ従いながら、歩むことができますように切にお祈りいたします。
敬老感謝主日礼拝を通して、教会の敬愛するお年寄りの方々初め、我らみんながもう一度日々自分に与えられている人生の真の人生の意味と感謝を持って、神の御言葉を通して示され、悟られ、徹底的に従うことにより、神の豊かな恵みと知恵を蓄えられ、祝福されて主と共に人生の歩むクリスチャンプレイズチャーチの全神の家族となりますよう主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！

<関連聖句>

「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない。」 -伝道者の書3章11節-

「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。」 ヨハネの福音書6章40節
「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」 -ヨハネの福音書5章24節-

「また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。」 -第一ペテロ1章17節-

「また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。」 -ペテロの手紙第一1章17節(新約聖書)-

「私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても神の下さる建物がある事を私たちは知っています。それは人の手によらない天にある永遠の家です。」 -コリント第二4章18-5:1節-

「私たちのすべての日はあなたの激しい怒りの中に消え去り、私たちは自分の齢を一息のように終わらせます。10私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。そのほとんどは労苦とわざわいです。瞬（またた）く間に時は過ぎ、私たちは飛び去ります。12どうか教えて下さい。自分の日を数えることを。そうして私たちに知恵の心を得させて下さい。」
-詩篇90篇9節-10節、12節-